

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 小さな「被災」に目を向けて

藤沢市立鵜沼中学校 2年 <sup>こじま</sup>小島 <sup>ゆづき</sup>柚月

自分の誕生日を、避難所で迎えた経験が皆さんにはあるだろうか。

2019年10月12日夜、猛烈な雷雨を伴う台風が長野県に最接近した。この台風の動きは、長野市の祖父母の家に居た母と私にとって予想外のものだった。本来この台風は関東に上陸するはずで、母と私はそれをさけるために長野市まで来たからだ。

夜になるにつれて、台風なんて他人事だと思って余裕があった私にも、「避難」の2文字がちらつき始めた。それでもまだその時は、安全な自分の家から雷を見る感じ、そんな気持ちで、のん気に避難について話す母の話を聞いていた。

だがそんな浮ついた気持ちは、避難所へと向かって行くうちに打ち砕かれた。もう避難先の体育館が見えるという状況で登った坂は、私の想像以上に恐ろしかった。上からどんどん下ってくる黒い濁流、カーナビから鳴り続ける緊急速報。当時小学4年生だった私は、このまま車が濁流にのまれるのではないかとという恐怖と、必死な大人達に相手にされない孤独を感じていた。

何とか入った避難所の環境は良いと言えるものでは無かった。夜中で冷えてきた体育館にももちろんエアコン、なんて物はなく、配られた毛布1枚で一晩を過ごすことになった。

水が配られ、固く冷たい床に寝転んだ私は、避難生活というものの現実を思い知ったような気がした。こんな生活が何日も続き、いつ洪水に家が沈むのかおびえて暮らすことを考えると、今まで自分が考えていたものより、実際の避難生活は辛く苦しく、精神が疲弊するものなのだと実感した。

祖父母の家はどうなるのだろうかかと不安なまま、私は眠りについた。夜中に何度も、緊急速報で起こされていたが、いつのまにか収まり、気づいたら朝を迎えていた。体が痛かった。家の柔らかい布団とはまるで違う、固い床で寝ていたからだ。それでも、その痛みは、なぜか生きている、と実感できる痛みだった。

そして、おばや祖母がいた所へ向かうと、2人だけではなく大勢の人がベンチにもたれかかったり、壁に寄りかかったりしたまま寝ていた。みんなが避難しているこの状況で、横になり足を伸ばせて寝られていたことさえ、

当たり前ではなく、むしろ有り難いことなのだと、初めてわかった。

この、誕生日を避難所で過ごした経験は、たった1泊だけれど、私の災害に関する考えを大きく変えた。

今まで、災害といわれ私が見たのは、死者数や洪水に吞まれた街など、目に見える大きな被害だった。それだけでも、災害の怖さを知ることができるし、みなショックを受けると思う。

しかしそれでは、ニュースを見た人には、漠然とした感覚でしか、「被災すること」が伝わらないのだと思う。なぜなら私も、被災について漠然と捉えていた1人だからだ。

「被災すること」は決して、家が水びたしになったり、家族や友達が犠牲になったりすること、それだけではないと私は思う。

食べ物は毎日同じもの、アルミホイルや配られた毛布をかぶり、固い床で寝る毎日が積み重なっていく、それだけで、被災した人の大きな負担になっていくし、これからの未来についての不安が日々大きくなっていくこと、それも、立派な「被災」だと、私はこの経験を通じて思った。

あの日から、私は、もっと細かい、一つ一つの被害について目を向けて、被災した人達を支えられるような人になりたいと思うようになった。

私たちがこの国日本に住み続けていくならば、災害とは否応なく付き合うことになる。今この作文を書いているときでも、テレビでは沖縄での台風災害のニュースが流れているくらい、日本は災害大国だ。

それでも、被災について、知り、学び、備え、周りの人達とともに危機感を持ち続けることは、私たち一人一人にもできることだ。

中学生で、今すぐ災害ボランティアに向かうことはできない。でも将来、被災した人を支えられる人になることはできると思う。

そのためにも、今の自分にできることを、一歩ずつ、進めていきたい。